

# 李炳憲における日本の神の把握

## View of Japanese Kami in Lee-ByeongHeon

小林 寛  
(Kobayashi Hiroshi)

### Abstract :

This paper clarifies that Lee-ByeongHeon's view of Japanese Kami.  
Lee-ByeongHeon was born in a Korean peninsula and grew up there.  
He went apprentice to Kang-YouWei who lived in China.  
Lee-ByeongHeon explained that in the Kong-jiao Theory the religion and the philosophy become same one thing.  
It is because "Daido (Tadong)" in the world will be seen in the future.  
It is the same idea Kang-YouWei has.  
Lee touched the classical Japanese literature at time when the country was being ruled by Japan.  
He thought also that Japanese Shinto would become the same one thing in his theory.

キーワード：李炳憲、孔教、神

Key Word : Lee-ByeongHeon, Kong-jiao, Kami

### はじめに

儒教を宗教と位置付けようとする孔教運動の東アジアの展開という観点から、李炳憲の日本把握とそれに基づく日本の神々の解釈をとりあげておきたい。康有為は西洋列強に対抗しうるのは精神的支柱として、キリスト教に対抗しうる宗教化された儒教がなければならないと考え、孔教を国教化しようとした。康有為の弟子として半島において孔教会運動を推進するのが李炳憲であった。李炳憲の「孔教会」は中国曲阜の孔教会と関連を持ち、1923年、培山書堂を設立し、康有為の理念にもとづいて展開されている。

李炳憲は世界の宗教は未来において合一するといい、さらに宗教と哲学とは未来において合一するという<sup>1</sup>。そこからすると、キリスト教も佛教も儒教も道教も合一し、日本の神道も孔教によって「大同」する時代を迎えることになる。

李炳憲は日本が半島を「総督」した時期に孔教運動を展開していて、日本の古典にも接していた。彼の著作には『古事記』や『日本書紀』に言及した部分がみられる。日本の神々が他の宗教の神や教えと合一しうる理由を李炳憲の著作に探っておきたい。近代の東アジアの思想家たちは日本の宗教について道教との連関において把握しようとする傾向を有していた。この点について李炳憲の認識は孔教の観点からする把握であった。

### 1 李炳憲の孔教運動

李炳憲の日本の神の把握をみるにあたって、まず、李炳憲の宗教的立場を確認しておきたい。今文学では儒教を孔子の創教であるとする。孔子が伝統の教えを祖述したのが儒教であるとか、上古よりの伝承によるものが儒教であるとする考えはとらない。儒教は孔子が託古改

制して創ったものであるとし、儒教は宗教であるとの主張になり、同時に儒教は孔子の本来の意図に復原されねばならないとの主張を生むことになる。李炳憲は『儒教復原論』に次のようにいう。

問ふ、子の儒教に於けるは名の貴と實とに循ふ。既に是の如くんば則ち、今儒教の原に復すが若きは乃ち馬丁路得の倡へて新教を立つが如きもの無からん歟、と。

答ふ、馬丁路得は則ち實は教を改めて原に復すに非ず。妻を娶るの一事を以て之を言へば已に耶氏の舊教と同じからず。惟だ僕は則ち眞に孔教の原状を復さんと欲する耳、と。

問ふ、何ぞ復原の二字は必ず此を以て自ら命とするを取る歟、と。

答ふ、耶教は則ち路得氏の苦心して潤色するに非ざるが若んば則ち或は幾乎かして息まん。儒教の如きは則ち精金美玉の塵沙泥石の間に混入すれども擧て以て之を存すれば則ち光明透徹し萬世一日の如く、毫末を加へずして求めて其の原に復す而已。路得氏の復原は実に改頭換面す。而して吾の所謂復原は乃ち經に反して本に歸す也。諸を路得氏の復原に比せば、豈に然るを信ぜざるか、と<sup>ii</sup>。

「問う、子の儒教においては（儒教という）名の貴と實とに循っている。既にこのようであるならば則ち、今『儒教を原に復す』というようなものは、ちょうどマルチン・ルターが倡えて新教を立てるようなものではないか、と。答える、マルチン・ルターは則ちじつは教を改めて、原に復すものではない。妻を娶るという一事によってこれを言うならば已にイエスの旧教とは同じではない。惟だ僕は則ち眞に孔教の原状を復そうと願うだけである、と。問う、何か復原の二字には必ず此を以て自ら命とするものを取っているのか、と。答える、キリスト教は則ちルター氏が苦心して潤色したものではないようなものであるから則ちあるはいくばくかして息んでしまうであろう。儒教の如きは則ち精金美

玉が塵沙泥石の間に混入していても、挙げて以てこれを存することは則ち光明が透徹して萬世は一日のように、毫末をも加えないで求めてその原に復すだけである。ルター氏の復原は実に改頭換面するものである。しかしわたしの所謂『復原』は乃ち『經に反して本に歸す』ものである。これをルター氏の復原に比べるならば、どうしてそうであることを信じないでいられようか、と」以上のように李炳憲は言う。「經に反して本に歸す」というのは儒教の經典は託古して語られているために孔子は祖述者に見えるけれども実は創教したと考えることを意味する。また儒教に対する孔教運動はキリスト教カトリックに対するルターの改新教に対比されるけれども根本的に違うものであると主張している。ここには梁啓超が康有為をルターになぞらえた経緯も影響している。李炳憲は孔教がルターの改新教とは違う意義を有するものであることを述べている。

李炳憲は西洋の学問体系から提起される宗教・哲学・科学の問題に対して儒教の位置を把握しなおそうとした。李炳憲は『宗教哲学合一論』で西洋は宗教と哲学が分かれているのに対し、東洋の宗教は宗教と哲学が合一されているとして、東洋の宗教の特徴を合一の側面から述べている。同時に、哲学と宗教とを分けているのは、哲学を真知とし、宗教を迷信として区別しているためで、哲学と分離している宗教は天堂地獄を設定する。このため仏教やキリスト教は現世を離れた世界を考え、神権に迷う宗教となってしまうと言う。これに対し儒教は現実世界と超越世界の区別が無く、しかも天と人間とが合一している道理を持ち、このために、儒教は宗教でありながら神権に迷わない眞の宗教であると考えている。

西歐の言、宗教は哲學と二を爲す。東方の言、宗教は哲學と一に合す。其の分る所以を究れば則ち其の眞知と迷信との別有るを以てするのみ。故に方便を設けて天堂と地獄とを立てて名詞を底すれば則ち迷信の自ら來る所也<sup>iii</sup>。

李炳憲は孔子を哲学者や政治家として捉え宗教家としては見ない立場を批判する。李炳憲は西洋の宗教家は神の権威だけを主張して、人間世界の統治には関与しないのに比べ、儒教が事物の位置を明らかにし、人類を相手にすることは政治、または哲学として考えることができる一応認める。西洋では政治が世界へ伝播し、科挙が発展したのは救世主の神力「救主之神力」から出たとする。李炳憲は全地球上に伝播している西洋のキリスト教はマルチン・ルターによって外形的に変わっている「改頭換面」であるとし、カントやダーウィンが出現したことで、さらに多くの敵によって取り囲まれてしまっていると考え。二十世紀以後は哲理が日に日に無くなり、各国の宗教家は迷信の城壁がとりのぞかれて行くことで、宗教と哲学とが合一して行くことを知るだろうとする。このような時代に孔子の教えは地球上にある唯一の宗教となり（天と人とが合一しているために）、哲学と宗教の合一した孔教として、全世界の大同教になるのだとしている。

二十世紀以後は則ち哲理は日に明らかにして迷信は日に薄れ、各國の宗教家は漸く中堅の壁壘を失ひて宗教と哲學とは必ず一に合す。夫れ然る後孔子方に地球上の掲一無二の宗教家にして孔教は乃ち全世界の大同教と爲る<sup>iv</sup>。

李炳憲は「宗教」という概念について、日本の明治維新初期に翻訳された用語で、別に「法教」と訳されもするとした上で、康有為の解釈に従って「宗」の字が必ずしも必要でないことを述べ、易を利用して儒教の宗教としての面を言う。それは『周易』観卦の「神道設教」、繫辭伝の「窮神」「尽神」等の語を引用しつつ、儒教にも神的な領域があることを示している。これにより、孔子を中国の先の時代の聖人達と比較しながら出世間に豊でているとし、孔子の宗教的性格と教祖的地位を与えようとしている<sup>v</sup>。

## 2 李炳憲における日本の神々

李炳憲が日本の宗教について述べた部分に次のものがある。ここには『古事記』の冒頭および『日本書紀』の冒頭が引かれて、日本の神と「韓・日・漢・満」の諸元神とともに白山に出現したと推測し、引いては世界の諸宗教の神が共通する存在であることを述べようとしている。

日本の古事記に云ふ、天地新發の時、高天原に成る三神を丹雀叢と名づく。書に亦た云ふ、天地の中唯一物のみ、便ち化して三神と爲るとは、其の年代と地点とは攻む可らず。然れども高天原は恐らく是れ白山の原也と<sup>vi</sup>。

李炳憲が記すところを訳せば次のようになる。「日本の『古事記』にいうところでは、天地新發の時、高天原に成る三神を丹雀叢と名づける。『(日本) 書(紀)』にまたいうところでは、天地の中で唯だ一物だけがあって、便ち化して三神と爲るとは、其の年代と地点とをさだめることはできないけれども、しかし高天原は恐らくは白山の原であろう、と」このようにいう。ここで引かれている『古事記』の文章と『古事記』の原文とは異なっている。『古事記』において原文を漢文として読み下せば次のように記されている<sup>vii</sup>。

天地初發の時、高天原に成る神の名は天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神にて、此の三柱の神は並に獨神と成りて身を隠す也。

『古事記』漢文の原文では「新發」ではなく「初發」であり「三神」ではなく「三柱の神」となっている。李炳憲は『古事記』を要約して日本の原初を示そうとしていることが分かる。『日本書紀』の原文は次のようになっている。

時に天地の中に一物生ず。狀は葦牙の如し。便ち神と化爲す。国常立尊と号す。次に国狹槌尊。次に豊斟淳尊。凡て三神なり<sup>viii</sup>。

『日本書紀』の原文では「三神」となっている。紀記には場所は示されていないが先に引いた李炳憲の文章の部分で「白山」と記されているのは「白頭山」のことを指し、白頭山の天池が東アジアの故地となっていると李炳憲が考えていることが表明されている。

中華の道家は上帝を以て原始天尊と爲す。日本の上古神代、神を併称して尊と爲す。大日靈尊は高天原を御して天照大神と号す。諸神に勅して輔と爲す也。之に八咫鏡を賜て曰く、之を平にし之を安にして中を執り失ふこと勿れ、と。大己貴神國人を諭して曰く、父母は敬ふ可し、妻子は愛む可し、と。此れ實に大東の宗教と哲學との底処を築く也。尚書の俊に籲て曰く上帝を尊べとは、指す所有る乎。此を以て之を觀れば則ち天照大神と曰ひ、檀木神人と曰ひ、帝俊と曰ひ、伏羲と曰ひ、天尊と曰ふは同じく一天神也<sup>ix</sup>。

中華の道家は上帝のことを原始天尊とする。日本の上古神代には神を併称して尊ともする。大日靈尊は高天原を御して天照大神とよばれる。諸神にみことのりして輔けとさせるのである。これに八咫鏡を賜わってということには「之を平にし之を安にして中を執り失ふこと勿れ」と。大己貴神は國人を諭してということには「父母は敬ふ可し、妻子は愛む可し」と。これは實に大東の宗教と哲学との底処を築くものである。尚書の俊に籲て曰く「上帝を尊べ」というのは、指す所が有るのであろう。ここからこうしたことを観るならば、天照大神といい、檀木神人といい、帝俊といい、伏羲といい、天尊というのと同じく一天神のことである。

このように李炳憲が語ることからすると李炳憲においては、神は諸民族によって名を異にしているも上帝たる同じ存在を別の名で表したにすぎないと考えられていることがわかる。孔教とは言いながら上帝を尊崇する教となっていることが理解される。

窃に韓・日・漢・滿の族を念ふに、俱に同

種を爲し、實に白山自り生れ出る也。中華の古史に曰く伏羲は仇夷に生ると。又曰く、巨人迹て雷澤中自り出づ。華胥の之を履て伏羲を雷澤に生むと、是れ白山の大池也<sup>x</sup>。

「ひそかに韓・日・漢・滿の族をかんがえてみると、ともに同種をなして、実に白山から生れ出たのである。中華の古史にいうことには『伏羲は仇夷に生れた』という。またいうことには『巨人があるいて雷澤中から出た。華胥がこれを履て伏羲を雷澤に生んだ』というが、これが白山の大池である。」このように李炳憲は記す。韓国・日本・中国・滿洲の四族は白頭山を同じく故地として考えている。日本の神々は白山に降臨したことになる。こうしたことは「踏海叢談」の「第六孔子は東方の族為り孔教は東方の教為り」にも表れている。

人は孔子の支那の聖爲るを知り、東方の族爲るを知らず、孔教の支那の教爲るを知りて東方の教爲るを知らず。則ち殆ど未だ之を思はざる也。易說卦に曰く「帝は震より出づ」と。また曰く「震は東方也」と。萬物は皆、東方より出づ。惟だ孔子の東方の族を爲すのみならず、何代の何人、孰れか東方の遺裔に非ざらんや。古の緯書に云ふ、摯・堯・稷・禹は皆な帝俊の子にして帝俊は東方の上帝也。支那に在れば則ち之に命して摂提天皇と爲し、朝鮮は之を稱して檀木神人と爲し、日本は則ち之を呼びて高天原の一物と爲す。神代の所伝の名は各の同じからずして其の實は則ち一也<sup>xi</sup>。

人は孔子が支那の聖であることを知っていても、東方の族であることを知らず、孔教が支那の教であることを知っていても、東方の教であることを知らない。則ちほとんど未だこれについて思いかんがえたこともなく、易說卦に曰く「帝は震より出づ」と。また曰く「震は東方のことである」と。万物はみな、東方から出ている。ただ孔子だけが東方の族であるというばかりではなく、何代の何人でも、だれが

東方の遺裔でないことがあろうか。むかしの緯書にいうことには、摯・堯・稷・蒿は皆、帝俊の子であって帝俊は東方の上帝である。「支那」にあればこれをなづけて摂提天皇といい、「朝鮮」ではこれをいうのに檀木神人として、「日本」はこれと呼ぶのに高天原の一物とする。神代の所伝の名はそれぞれ同じではなくても、その実の一つである。李炳憲はこのように明言している。

帝は東に生まれ出たという易経説卦を引いて、上帝が震すなわち東に出たと言い、さらには東方の人類の起源を白山に考えている。東のみならず全人類、万物は東から生まれたとも述べている。これはアジアを一つにしたいという思いから出ている着想であろうとみることも可能であろう。日本の神を考えたとき天照大神と造化三神とは単純には同一視できない。しかしながら李炳憲は神という括りの中に名のみ異なるものとして同化して把握している。孔教は中国人の宗教のみではなく東の宗教であることから全世界の教であるとする。こうして日本の神も孔子の教えに同化すると考えられていることになる。

### 3 李炳憲における上帝

そこで李炳憲の宗教と上帝について今一度確認しておきたい。

孔子の宗教家たるが若きに至れば則ち莊嚴燦爛たる其の精義、具はりて大易の「神道設教」の四字に在り。豈に非宗教を以て之を目す可き乎<sup>xii</sup>。

李炳憲は易の「神道設教」の四字が孔教たる儒教の宗教性を端的に表すと考えている<sup>xiii</sup>。「神道設教」という語は易の観卦の次の例に由来していた。

象に曰く、大觀上に在り、順にして巽、中正以て天下に觀す。觀は盥にして薦せず、孚有りて禺頁若、下觀て化する也。天の神道を觀るに而も四時恣はず。聖人神道を以て教を設けて天下服す<sup>xiv</sup>。

易における「神道設教」の語は観卦の象伝に見られる。天の神道は四時恣わないということを目ざしとする箇所、秩序有る法則を「神道」としている。聖人は神道をもって教を設け天下が服すというのであるから、法則にかなった道を聖人がしめすことになる。これについて李炳憲は次のように言う。

虞曰く觀は臨に反する也と。

李炳憲が述べるように「神道設教」が儒教の神秘性・宗教性の根拠とする場合、秩序ある法則があること、道があること自体が神秘的だという解釈をすることになる。「怪力乱神」を語るのではなく、あくまでも秩序に適った力・神が存し、それを教として設教していることが、儒教の神秘性すなわち宗教性であることにもなる。日本の神々についていえば日本の神々の道たる「神道」は儒教のくすしき力を示す「神道」を念頭に理解されていると言うことができる。それは先に見た言葉からも理解される。神道は上帝によって根拠づけられる。

太極は上帝の代名詞たり。而して上帝は實に太極の主翁也<sup>xv</sup>。

李炳憲によれば朱子学の究極の存在根拠である「太極」が「上帝」の代名詞であるという。万物の存在の根拠となる「太極」は上帝の性質として位置づけられ、天の主宰である上帝に太極が包含され、上帝のはたらきは太極と同視される。

按ずるに詩書禮樂とは何ぞや。孔子の教に非ずして皆其の名義に因りて之を裁して經と爲る。易の書たるが如きは乃ち孔子神道もて教を設くる大經にして實に六經の主腦也<sup>xvi</sup>。

易経は孔子が「神道設教」によって制作したもので、儒教の經典の六經の主腦であるということからも、李炳憲は宗教性を神秘に見ているこ

とが理解され、さらにその神秘性は「上帝」に存することが理解される。上帝とは人格神としての性格を有した存在でもあって、同時に秩序そのものである存在でもあった。ここにはキリスト教の神観が影を落としているということも可能であろう。上帝に関して次のようにもいう。

問ふ。然らば則ち造化の上帝の何処に在ると主張するやと。答ふ。近くして吾心よりし遠くして五州の内六合の外に至る。在らざる無く、亦た在る処無し、と。問ふ。上帝、亦た形状有りや否やと。答ふ。天下の物、皆形状有り。故に一隅に滞る。而るに惟だ上帝のみ則ち形状無し。故に上は碧落を窮め、下は黄泉に及び、物として管せざる無し。能く物を体して遺さざる所以也<sup>xvii</sup>。

問う、それでは造化の上帝が何処に在ると主張するのであろうかと。答える、近いところでは吾が心から遠くにあって五州の内、六合の外にまで至る。ないということは無いし、またここにあるということも無い、と。問う、上帝は、また形状が有るのであろうかそうではないのであろうか、と。答える、天下の物は、皆な形状が有る。したがって一隅に滞ることになる。しかし惟だ上帝だけは形状が無い。だから上は碧落を窮め、下は黄泉に及び、物としておさめないものは無い。能く物を体して遺さざるゆえんである。李炳憲はこのような言って、「上帝」は形状なく、近くは吾心より遠くは五州の内、六合の外に至るまであまねく存在するものであり、すべてのものを治め管するものとして捉えている。上帝と理については次のように言う。

問ふ、儒家は或いは心を以て理と爲す。而して天の主宰も亦理なるは是か否かと。答ふ、心は固より衆理を具ふ。而して靈魂捨てて心を説くも得ず。天の主宰は即ち上帝なり。而して帝は即ち神の稱なり。心の理に於けるや、命と意と本自ら同じからずと<sup>xviii</sup>。

問う、儒家はあるいは心を以て理としている。そうであれば天の主宰もまた理であるというのは是か否か、と。答える、心はもとより衆理をそなえている。しかし靈魂を舍いて心を説くことはできない。天の主宰はそのままだちに上帝である。そして帝はそのままだちに神の称である。心の理におけるや、命と意とはもともと自ら同じではないと。このように述べてここでは李炳憲は「帝とは神の称である」と言う。帝は神の称であることから、上帝は神々の主を意味することにもなる。さらに人間の「心之神明」が上帝に通ずることにもなる。上帝は教の根拠となっていることがここに示されている。

宗教説としての上帝・鬼神について李炳憲は仏教は鬼神に事えて上帝に事えず、耶教は上帝に事えて鬼神に事えず、儒教は上帝に事えて兼ねて鬼神に事えると捉えている。「上帝」なる語を用いて李炳憲は諸教を合一する道が儒教にあると考えていることがわかる。したがって諸宗教、諸哲学は儒教のもとに合一することになる。

先に見た「観」卦について「易経今文考通論」には「設教の二字、経中の第一の着眼処也<sup>xiv</sup>」といい、神道設教の聖人は救世の教主であることが考えられている。こうして孔子が設教したのであって、儒教は孔教である根拠ともなって来る。

李炳憲は儒教の優れている点として天地万物のすべてを包含して教が成り立っていることを挙げている。これに対し西洋の学は宗教と哲学が分離していると言う。教会と王権とが分離する伝統を有する西洋に対して、儒教はその両者と兼ねることを評価している。「西欧の宗教を言ふは哲学と与にして二と為す。東方の宗教を言ふは哲学と与にして合一す<sup>xx</sup>」とし、李炳憲は「宗教哲学合一論」を著していた。その内容は宗教と哲学は将来合一するというものでありながら、李炳憲における儒教、すなわち孔教においては、宗教と言われる概念と哲学と言われる概念とが既に合一して存している宗教であり、大同教となりうるという先に見た主張となっている。孔教は内外を区別せず天人が合一している教であると捉えている。李炳憲には天に

ついで『天学』なる著作があり天の主宰としての存在に言及している。

儒教の教主は孔子であるとするのが孔教であり、孔子なくして儒教はあり得ないと考える。しかし孔子の前に儒教は全く何者も存しないのではなく儒教の原として天があると李炳憲は言う。「天の主宰」とは天地の心であり條理であり造化の主であることになる。

孔子の道は大なるかな、備はるかな。是以て六合を彌して置さず<sup>xxi</sup>。

進化の序は窮すれば變じ、變ずれば通ず。故に守舊の久しきは終り、必ず通じて新に趨く。迷信の久しきは終り、必ず通じて真一定理に反る。故に曰く、宗教と哲學とを合して集中的の爲すは其れ儒教なるのみと<sup>xxii</sup>。

天の主宰たる上帝を知る耶教ではあっても、現世を離れた神権に迷う面があると李炳憲は考える。又、神を知る仏教も上帝を知らず神道に迷う面がある。西洋においては宗教と哲学が分離しており、近代において哲学を真知とし宗教を迷信とする区別につながるとする。哲学と分離した宗教は天堂地獄を仮設し神権に迷いうる。これに対して、儒教は内外が無く、天人合一した宗教であるとし、西洋の宗教が神権のみを言い、人間界の統括に関与しないのに対し儒教は神道と人道に与るとする。二十世紀以後は哲理が日に強くなり、宗教と哲学が合一することを知らせようと言う。李炳憲は孔子の教である孔教は哲学と宗教が合一した宗教として全世界の大同教になると考えている。

日本の儒教について、李炳憲は「第五論日本儒教及び交通始末」において王仁が日本に儒教を伝えたことを述べながら日本が東アジアの軸たる役割を果たしていることを言明している。

日本は撥乱を履み、反て之が動機を正さんとす。蓋し吾が孔子の大道に歸さん哉。日本は未だ中韓漢之儒毒を嘗めざれば則ち之を行ふこと猶ほ手を反するがごとき也。

日本の當に軸爲るべきは宜しく深く二千年の交通の旧誼を思ひて以て之に処すること有るべき也。

日本は撥乱を履むことで、反ってその動機を正すことになった。おもうに吾が孔子の大道に帰そうとするのであるのだ。日本はいまだ中韓漢の儒毒を嘗めたことがないので則ちこれを行なうことはちょうど手を反すようにかんたんであるようなものである。日本がまさに軸たるべきことは宜しく深く二千年の交通の旧誼を思つて、これに処するようにすべきであろう。このように李炳憲は日本の儒教の未来を語る。李炳憲の儒教とは合一する宗教の意であるから、日本の宗教の未来はアジアの軸として孔教に収斂すると観じられていることになろう。この場合の儒教とは「第七論日本当闡今文真經<sup>xxiii</sup>」にあるように「今文の真經」によるものを意味している。

李炳憲が朝鮮総督および日本の原敬内閣に出した書簡11編が「山房叢書」としてまとめられている。ここには儒教の宗教としての地位を高めようとの意図が示されている<sup>xxiv</sup>。日本の宗教政策が儒教の真義に基づくものであるべきであるとの考えが現実政策に則して述べられている。

## おわりに

李炳憲における「宗教」は易の「神道」の面に重きを置いて説明がなされるものであった。儒教の「教」字には既に神秘性が有り、あえて宗教と言わなくてもよいとする。儒教は性霊を重んじ天人の極致にあり、軽重から言えば性霊を重んじて肉体を軽んずる教であるとする。ここからすると儒教における政治・哲学は余事であり、儒教を政治・哲学説と捉えることは誤りであることになる。儒教の宗教としての核心は觀卦の「神道設教」にあるとされ、「宗教」の性格としては神道に重きを置き、儒教は神道を核心とすることを述べようとする。

李炳憲において「神道」が重視される根拠として「上帝」の存在がある。「帝は神の称である」と李炳憲は言い、人と上帝とは「神」によ

って通じうる。上帝は時空を越えた存在者、感覚によって捉えられない存在者であるとされる。「太極」は上帝の代名詞であり、理としても理解されうる。儒教は「神道設教」によって孔子により教として成立したもので、「神道」は秩序ある法則として存し、天人を合一する教となっている。時代が進むことで哲理が強くなり迷信が除かれることで宗教と哲学は合一し、既にその両者を区別せず合一している儒教は孔教として世界の大同の教となると考えられている。

こうした考えの中に李炳憲の日本の見方もある。李炳憲は日本の圧迫を感じる中に半島の孔教運動を進めた。李炳憲は韓・日・漢・満は白山に生まれた同族であろうとし、「万念灰のごとし」として日本による祖国の圧迫に嘆きながら、過去同族であった民族が将来において孔教によって合一する日を迎えると考えていた。

日本の儒教は王仁によって伝えられたものであることを述べながら、韓・日・漢・満は祖を同じくするが故に儒教の精華を日本は自己のものにして世界の合一に一定の役割を果たすであろうと考えられていた。

## 註

- i 「儒教為宗教哲学集中論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年209頁を参照されたい。
- ii 「儒教復原論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年178頁を参照されたい。
- iii 「宗教哲学合一論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年461頁を参照されたい。
- iv 「宗教哲学合一論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年462頁を参照されたい。
- v 拙稿「李炳憲における孔教」『目白大学人文学部紀要』を参照されたい。
- vi 「儒教為宗教哲学集中論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年209頁を参照されたい。
- vii 『古事記』原文をあえて漢文書下し文にした。
- viii 「神代上」『日本書紀』を参照されたい。
- ix 「儒教為宗教哲学集中論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年211頁を参照されたい。
- x 「儒教為宗教哲学集中論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年211頁を参照されたい。
- xi 「第六論孔子為東方之族孔教為東方之教」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年254頁を参照されたい。
- xii 「警告域内同胞儒林」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年160頁を参照されたい。
- xiii 琴章泰「真庵全書解題」『李炳憲全集上』亜細亜文化社1988年にもこのことは述べられている。
- xiv 『易経』「観」卦 彖傳を参照されたい。
- xv 「天学」第三章『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年197頁を参照されたい。
- xvi 「易経今文考通論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年219頁を参照されたい。
- xvii 「天学」第三章『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年197頁を参照されたい。
- xviii 「天学」第三章『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年197頁を参照されたい。
- xiv 「易経今文考通論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年248頁を参照されたい。
- xx 「宗教哲学合一論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年461頁を参照されたい。
- xxi 「儒教復元論」叙言『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年177頁を参照されたい。
- xxii 「儒教為宗教哲学集中論」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年212頁を参照されたい。
- xxiii 「第七論日本當闡今文真經」『李炳憲全集』254頁を参照されたい。
- xxiv 「山房叢書」『李炳憲全集』亜細亜文化社1988年121頁を参照されたい。